

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	温泉岳物語[承前] : 新体詩 : 文苑
Author(s)	花柴
Citation	龍南會雜誌, 126 : 61 - 64
Issue date	1908-06-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6144
Right	

自分は何とはなくあの月の中に端然として清司さんが坐つて居る様な氣がする。
清司さんも、靈があるあらば此の可愛藤さんの同情に泣いて居るであらう。
見れば、藤さんの顔は月に輝されて凄く青い。……

温泉岳物語

花

柴

『六』

乳子が、むつがる是非をぢみ
妻が住む瀧を戀ひ來れば

深秘の霧に閉さるる

温泉が嶽の、いたゞきゆ

銀河を巻いて四千尺

白雲、蹴崩して落つるかゝ

巖、危き淵の上に

立ちて妻を呼ぶ涙聲

『喃、聞け淵の底に住む、』

いとゞき妻よ、汝が乳子に

残せし眼球は、わりあうも

あらけあき手に奪はれぬ

日にけに瘦する、いとゞ子は

貫ひ乳すれど育たねば

解けぬ結びや母と子の

ゑにゝの甲斐に眼球をまた

せちに欲りして願ふかな』

雲時が程に青淵は

四顧迷朦の靄罩めて

いづらともなう聲のしぬ

『いぬる日、右の眼をぬきて

いま、また眼球をぬき取らは

妾は永久に眼の盲ひん

眼を惜しまんか、をを、さらじ

さらじよ、何にか惜むべき

明はかくとも、しかすがに

嬰子よ、生い育て、わどあしう

左の眼をも參らせん

受けませ、戀し、我か夫よ

さらば』といふに、きと見れば

月も羞らう花嫁の

ありし昔に、かはらねど

笑めば、み空の星と輝る

双の眼あきか、悲しうて。――

『いとし』抱けば影もなく

眼球のみ、手には残れども。

『七』

最後の眼球によろこびの

をさなき微笑も暫時の間

またも苛酷の耳が聞き

奉つらさす國のをさ。

人に血汐は受けぬれど

大蛇の腹に宿りては

この子不思議の性にして

母者の、眼球を抱かねば

乳も、ふくまで、しなへよる。

『八』

あだや移り香、残るあり

寂しき闇に嬰子を守り

すかし倦んじて、とろむ間に

夢か三夜、たわまなう

枕に來ては妻が泣く

『宿世もろなる、いとし子の

命危き期ぞ逼る

生ひ育つ望ありもせば

我身は何か惜しむべき

乳と代ふべき双の眼の

あければ今や、いかにせん

さらば我か夫、嬰子^{ちご}をゐて
しばし七十里^{せちり}の外^{そと}ある

人なき里に落ち玉へ

必然^{きぜ}、此の國を滅ぼして
再び眼球^{たまたま}を得しめあれ』

『九』

乳飲^ちまぬ不思議の子よと謳はれし

嬰子^{ちご}の泣き聲、父と共に

忽然^{こつぜん}とて村に絶ね

五日六日^{じゅうろくにち}の程こそあれ

紺青流^{こんじょう}す虚空は

ねばろくくと雲霧^{くもき}らひ

温泉^{おんせん}か嶽^{たけ}の絶頂より

眞一文字に長く曳いて

白虹^{びやくこう}、陽^ひを貫^つぬくぞ見^みえし

眼箭^{がんせん}、忽ち乱射して

大入道めく黒雲の峯を裂き

雷霆^{らいてい}怒り、ごよめけば

雷光一閃七つに折れて

山河つんざく勢い猛や

七日七夜の小止みあく

電火劫風、はためけば

妖魔、得意の勝鬨^{せきど}をあげ

惡龍、歡喜の怒濤^{なみ}を巻き

海を傾け注ぐかな

陸地^{くもち}は破ふれ極惡の

(しかも纖弱^{かよわ}さ)人の子が

不正に呪ふ叫喚に

大宇宙^{おほあめつち}も動搖^{どうご}むまで

大蛇、憤怒^{ふんぬ}の復讐に

呪はれ積みし國も人も

滅びし跡は漫々と

海波^{かいば}たゝねて有明の

一碧靜かに弦月^{げんげつ}を浮け

遠空高く嚴として

怨念消えず焔と燃ゆる
温泉が嶽の陰、浸す也

(完)

紫 花 集

古

梅

時

流るる、

時はこの國と

君がくにとの界をば。

おがれに浮ぶ、

あああはれ青朽葉——

あなあはれ乾反葉——

かつては榮はしものゝ殻。

さくらぎに

うつらうつらと

わが影の落ちては透ける

綾底を、あな、紫の桐の花——

六十四

いづれゆ、いづく、夢の華。
われは立ちけり永劫は岸。
さばれさ、びしき夕闇に。

梅 檀

君はあらずて

鈍色の空にまがへり

うす色の梅檀の花。

敬らずや、散れり、昨日迄

六尺の髪に、ごろにかゝりしを。

幹うがち

いざ詩秘めん。

逝きし子の柩ならん

やよ汝よ

ゆるせ、はかき汝が榮を。

秘 語